

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0770700375		
法人名	特定非営利活動法人 豊心会		
事業所名	グループホーム すずらん 1		
所在地	福島県須賀川市東作22-8		
自己評価作成日	令和4年2月20日	評価結果市町村受理日	令和4年5月9日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/07/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人福島県福祉サービス振興会		
所在地	〒960-8253 福島県福島市泉字堀ノ内15番地の3		
訪問調査日	令和4年3月25日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

食住に関しては特に力を入れており、食事は旬な焼いておいしい魚や野菜などを取り入れ、入居者の皆さんに季節感を感じていただくとともに、七輪や卓上コンロを使用して炭を通して匂いや囲んでの団らんできる場所での食事を作るようにしている。入居者からも「昔は七輪で鍋を温めたりしたもんだ」と懐かしさを感じる方も多い。職員も入居者が昔から食べなれている食材、入居者に教えていただき一緒に作ったりしている。「住」に関して、入居者の部屋は「自分の家のように・・・」をコンセプトに、ご本人、家族様にも協力していただき、お部屋に写真やお話、可能な限り今まで住んでいたお部屋に近い環境作りを務めている。実際にお部屋の環境(ベッドから布団に)を整えてみたら今まで行うことが見られなかった布を朝起きたらたたむなど自発的に行うような姿も見られる。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

1. 利用者の思いや意向は会話やアセスメントシートを活用し、馴染みの人や場は家族が作成した「生活史」から本人に聞き取りを行い把握に努めている。利用者の思いの実現や馴染みの人や場の関係継続、地域との連携という基本理念の共有化が図られ、職員全員で利用者本位の支援に努めている。
 2. 旬の食材を取り入れ、利用者が季節感を感じられるメニューや希望に応じた食事を提供している。利用者とともに調理を行うことで、匂いや音、視覚を刺激して食事を楽しく取り組みを実施している。また、羽釜や七輪を使用した料理を行い、利用者の記憶を刺激する取り組みも実施している。
 3. コロナ禍で中断しているが、毎年、自治会と共同で芋煮会を開催している。コロナ禍においても認知症カフェの開催、認知症啓蒙のFMラジオ放送、保育園との交流など地域との交流継続に努めている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごさせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	入居者様が住み慣れた町で安心して生活できるようにコロナ感染対策のもとでも職員とご家族が話をし、ご家族と待ち合わせして墓参りをしたり、なじみの店で買ったものをおやつや、食事を提供している。	理念の「自分が住みたい我が家」とは地域との繋がりのある家という意味を職員間で共有化し、地域密着型サービスの意義が理解されている。理念は玄関に掲示し、毎年深掘りして年間目標を立て、毎朝、その日の重点目標を決め、ケアを積み重ねることで理念を実践につなげている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	運営推進会議を通してコミュニケーションを取っています。利用者との繋がりはご家族とを第1としており、地域とは減ってきている。	町内会に加入し利用者と回覧板を届けていたが、現在は職員のみとしている。また、町内会と合同で毎年開催していた芋煮会も中断している。地域の会館を会場に開催してきた認知症カフェはコロナ禍以降も回数を減らし継続して開催している。隣接の保育園とは感染対策を講じ震災関連行事を通して交流を図っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	今年度の開催は1回であったが、「ポータンカフェ」という認知症講座への案内を家族様や地域の下端配布し認知症への理解や疑問など知っていただけるような方法をとっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	県内の感染状況に合わせて開催または資料のみを配布している。コロナ禍でも出来る事していることを報告し、意見を取り入れながら1つずつよいGHIになるように努めている。	コロナ禍においても、市内のクラスター発生とまん延防止措置発令のため書面開催とした2回を除き、隣接のデイサービスの会議室で2か月に1回運営推進会議を開催している。利用者の所在不明時の防災無線が聞きとれなかったことから町内会を通じて市へ改善要望を行うなど委員から出された意見を運営等に活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	法人として認知症の理解を地域に知っていただく為またいろんな知識を得るためにも、認知症カフェの開催やFMラジオに番組を持ち地域包括ケア推進会議のメンバーとして活動の幅を広げている。	利用者の介護認定更新手続き等で市の担当者を訪問した時に、情報交換を行っている。また、認定調査のため市の担当者が来所した時は、事業所内を案内し実情を伝え協力関係を築くようにしている。さらに、市の後援を受けて認知症の啓蒙普及のためのFMラジオ放送を行うなど連携が図られている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人のレベルアップ研修で、身体拘束廃止の講義を行い全職員が同じ内容を理解できる場を作っている。朝のミーティングで話し合う機会を設けている。今年度はリモートを使つての研修を受け継続的に学ぶ機会に努めている。	法人全体で身体拘束の廃止に向けた倫理委員会を毎月開催し、事業所から職員が委員として参加している。また、法人で身体拘束に関するレベルアップ研修を開催し、受講者が伝達研修を行っている。スピーチロックは、職員会議で話し合い、防止に努めるなど身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	倫理委員会や内部研修などを通じ、全職員が同じ内容を理解できる場を作っている。また、細かい傷なども原因を考え、リーダー中心にミーティングなどで、何で出来た可能性が高いかを考える場を設けている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人のレベルアップ研修で学ぶ時間を設けている、また法人理事が専門団体で権利擁護委員であり実際に成年後見業務を実施しているのでレベルアップ研修にて直接学ぶ機会が設けられている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には法人として大事にしている事や重度化の対応、ご家族と利用者の不安や疑問には理解されるまで説明し、その後も分からないことがあれば説明する機会を設けている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	新型コロナ感染対策によりご家族に資料配布とアンケートにより行っている。利用者には担当職員を付け、ご家族とのつながりを大切に電話連絡など話す機会を継続しご家族の思いや不安を聞いている。	職員は、生活のなかでの言動を介護記録に記載して利用者の意見の把握に努めている。家族の意見は面会や電話をした時に伺うようにしている。コロナ禍前は年1回の家族会で意見を出してもらっていた。また、毎年家族アンケートを実施し意見を抽出し、運営に活かしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	年に1度は面談し一人づつお話をすることを努めている、より話しやすい関係を持つことに努め日頃から話す機会を作り続けていることから職員からの要望を聞くことが出来ており、次年度には利用者のベット全てにセンサーマットを設置する。	管理者は年1回の個人面談や日頃の会話を通して職員の意見の把握に努めている。職員会議の中で、職員が意見を出しやすい雰囲気づくりに努め、意見や要望を聞いている。休憩時間の調整やコロナ禍に伴い食材の購入を配達に変更するなど職員の意見を業務改善に活かしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職場の雰囲気づくりを大切に「お互い様」という気持ちで仕事をしていく事を常日頃話していることで人間関係で悩む職員は少ない。また職員各々の役割を出来ることからの視点で行っていることで職員に自信が付き定着している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内部外部と問わずに研修に参加できるように機会を設けている。外部の研修も感染対策のもと同じ職種の人たちとかかわる大切な場所であるということからも行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	リモートワークを活用し業務現状の把握、改善点など意見を述べ合い伝えられる環境作りに努めている。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ホームでの生活を送っていく中で不安を感じていることを、現状行っていることとこれからどのような生活を送る事を望んでいるのかをご家族と話す機会を設けている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族様に疑問や不安がないか随時、電話やお話をする時間を、管理者及びリーダー、入居者担当職員が面会時や電話などの際に話を聞くようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	担当ケアマネジャーや他事業所の担当職員との連携により現在に必要な支援、今後考えられる支援でグループホームでも支援が可能なのか、どのようにしたらできるのかを考え支援に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者同士の距離を近くに保ち続けることで利用者同士の関りが出来ている。体後上手くきかない方に髪のを溶かす、食事を介助する、手を握り声を掛ける姿が自然とみられる。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	定期受診やワクチン接種などは家族様と一緒に通院できるよう支援している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	新型コロナ感染対策のもとご家族中心の対応となっている。ご家族に対しては来ていただくだけではなくこちらから出かける取り組みを時期の行事に加えて行っている。	入居時の実態調査時のアセスメントに加え、家族へアンケートを実施し、利用者の「その人を知る生活史」を記入してもらい、入居後に本人から得た情報と合わせて馴染みの人や場の把握に努めている。コロナ禍においても家族の協力や職員同行による墓参りなど馴染みの関係継続を図っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の関係を普段から把握し、座る席の配置など考慮している。職員が仲介に入り塗り絵など入居者同士が関われる空間づくりに努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	当グループホームでお亡くなりになった利用者のご家族が現在も運営推進会議に参加されたり、その他の退所にしてもその後の相談も受けられることをしっかり伝え関係を断ち切らない支援に努めています。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	契約時に確認させていただくが、構えてしまうと入居者も言いづらい場面見られるため生活してみ慣れてきたところに普段の会話から意向を読み取れるように意識して接している。	センター方式の「私の姿と気持ちシート」を使用して利用者の思いや意向の把握に努めている。利用者と接するなかで得た情報をシートに追記し、半年ごとに書き換えている。また、利用者に大きな変化があった時にもシートを更新して、利用者の思いの把握に努め、職員間で共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご家族から聞いたことはケース記録、情報共有ノートなどで職員全員で共有している。グループホームでもそれに近い暮らしをして頂くよう一つでも多く取り入れている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員は出勤時に利用者皆さんに挨拶をしながら顔色や声の張りなど観察している。朝のミーティングだけでなく遅番者出勤時も小さなミーティングを行い情報を周知しその日の関わりを実現するための話を持っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者本人の思いや希望を日々の生活でしっかり聞き、家族様にもその旨伝え家族の想いも合わせて反映・実現できるように密に話し合いアセスメントの作成を行いプランに繋げている。	私の姿と気持ちシートで把握した本人の言葉、24時間シートから困っていることや時間帯を抽出し、不安の解消や思いの実現をどう図っていくかを職員会議や朝のミーティングで話し合い、ケアプランの作成に繋げている。モニタリングは担当職員がまとめた評価表を計画作成担当者が介護記録や職員より収集した情報から確認して実施している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケア記録を活用しており内容の早急性を考え計画に反映している。また利用者の変化についてはご家族に現状と経過、対応後という3つを大切に報告していることで計画に対してご家族の要望が出やすいよう関係性を気づいている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	新型コロナ感染の中でも感染状況に合わせて面会を中止することなく継続している。その1つにホームの外でご家族と待ち合わせをし散歩をするなど物事を柔軟にとらえて対応を考え続けている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	介護予防ボランティアは開始の段階ではよく利用していたがこの3年ほど参加希望が無い事が課題でありGH側からの積極性が必要と感じている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	看取りに対してのかかりつけ医の可能な対応とご家族の要望に違いのないとき、専門の診察が必要でない限り入居前にかかっていた病院受診の継続を大切にしている。	入居後も家族同行のもと、今までのかかりつけ医を継続して受診できるよう支援している。コロナ禍の現状下、協力医に加え、かかりつけ医の往診態勢も整っている。受診結果はその日のうちに家族へ電話連絡し、情報を共有している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回看護師に健康チェック時に状況に応じて相談している。必要な情報に関しては管理者へ相談し、早急な対応している。また当法人の会長が看護師の為、緊急時など状況に応じて訪問などを行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は管理者が家族と共に説明を受けている。退院までと退院後の話し合いも三者で行っている。また入院時には管理者・リーダーと可能な限り利用者に会えるように病院の相談室と話し合い利用者が安心して治療を受けられるよう看護師に情報提供できるように努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	利用者の変化に応じその都度ご家族に説明話し合いご家族の希望や本人の希望を取り入れている。またかかりつけ医、訪問看護師等、ご家族の意見を聞き配慮した対応が出来るように努めている。	入居時に「重度化・看取りに関する指針」を説明し同意を得ると共に、随時「終末期の生活支援に関する覚書」により本人・家族の意向を聴取している。協力医は365日24時間対応可能で家族・利用者の安心につながっている。看取りケアの振り返りを行い、日々のケア向上に活かしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応方法や連絡体制などマニュアル作成や、利用者の状況に合わせたご家族への連絡体制は行っているが、なかなか応急処置な定期的には練習は出来ていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	ハザードマップや災害対策委員会から発案された訓練を定期的に行っております。入居者の避難体制に関しても日頃の訓練とマニュアルを基に実施しています。	年度消防計画に基づき、総合訓練を2回(1回は消防署立ち会い)、水害訓練、雪害訓練のほか、所在不明者の捜索訓練、東日本大震災の教訓から停電時のシミュレーション訓練も実施している。衛生用品は事業所内に、食料品は隣接のデイサービスセンター及び法人本部に約1週間分を備蓄している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者の排泄に関しては数字で確認し合う事に務めている。利用者に対しての声を掛ける際利用者がなじみのある言葉を多用し続けて他の利用者にも使用をし続けてしいその利用者に対してそぐわない対応となっている時がある。	居室に入るときは不在時にも必ずノックをするともに、清掃もできる限り利用者と共にしている。失禁等の対応には職員間で分かる隠語(数字)に表現を代えて、利用者の尊厳を重視したケアに努めている。介護記録ファイルは事務所内の書庫で管理している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員の主観で決めることなく、入居者様と一緒に話をしながらメニューや余暇時間の過ごし方などを決めています。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入浴などは特に入りたい時間帯などの希望を入居者が決めている。起床時間や就寝時間も同様に職員都合にならないよう職員間でもリーダーより指導行っております。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	施設の中だからではなく、社会性として身だしなみなどには丁寧に起床時に行うようにしております。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	職員と一緒に作るもの、入居者様だけで味噌汁を作っていたりなど感染症対策をしたうえで準備をしております。	旬の食材を取り入れ、利用者と共に下準備や目の前で調理をすることで、視覚・嗅覚・聴覚からも美味しさが伝わるように支援している。親しみある羽釜や七輪を用いて調理する等の“手間”も大切にしている。干し柿や漬物、おはぎなどを一緒に作り、季節の味も楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	前年度よりタブレットを導入して水分量、食事量を確認している。今年度より管理栄養士が月に1度栄養指導をして頂きアドバイスをいただいている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	歯磨きは自ら出来ることは行い、職員は確認をする。難しい方には介助を要し、歯が欠けていないかを確認する。状況によってしか通院、往診を行う。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	居室内に立ち上がり、入口まで手すり代わりに椅子を置く、また夜間トイレ付近の明かりをつけたままにすることで利用者自身がトイレへ行く事が億劫にならずに、トイレの場所を分かりやすくすることでトイレに行かれる姿がある。	安心してトイレに行けるようにベッド位置の工夫や夜間照明の配慮などのほか、同性ケアや便座着座後に膝掛けを使用する等、尊厳を重視し、自立支援に向けたケアを実践している。安易に下剤に頼らず、水分補給や乳製品を摂って頂き、自然排便を促している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便に繋がる繊維質の食べ物として芋類を摂る機会を増やしている。利用者によって腹部のマッサージ、歩ける方には体を動かして頂けるよう支援に努めています。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴などは特に入りたい時間帯などの希望を入居者自身が決めている。 夜間浴(18時以降)は出来ていないのが現状。	入浴は利用者が希望する日にち・時間帯に職員が合わせて対応し、週3回ほど入浴している。市販の入浴剤のほか、ゆず湯や菖蒲湯を利用し、BGMも流すなど快適に入れるよう工夫している。介護度の高い利用者もリフト浴で安心して入浴できるよう支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	常夜灯の使用や、布団も自宅から持ってきていただきなじみのある寝具を使用している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	利用者が服薬している薬についての処方箋を職員皆が分かるようにファイルしている。薬に変更があった時には管理者からの説明もあり職員全員で共有し変化が無いか記録しています。誤薬もないよう服薬まで3回の確認が行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	バーベキューコンロを使用しての魚や焼き肉を行ったり、入居者様に焼いていただいたりそこで話をしたりし、日頃と違った事の楽しみの時間を作っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	新型コロナ感染対策の中でも感染状況に合わせて人混みを避けたドライブやご家族と実家に帰り過ごす時間も作っています。季節を感じる事として日常的に事業所の周りで季節を感じる事が出来る花や干し柿を見るなどは日頃行っている。	コロナ禍で外出が制限されるなか、空港公園へ紅葉ドライブやお墓参り、医療機関受診の帰りに自宅で食事をする等、利用者の希望をふまえた外出支援をしている。事業所近隣を散策して季節感を味わう時間も大切にしている。4月には利用者や家族とのお花見を計画している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	訪問理容などでは自身で支払いをしている。外出は出来ていないので払える環境が作れなかった。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族からかかってきて電話で話すことはあるが、自身でかけたり手紙等は行っていない。実は行きたい入居者もいるかもしれないので、職員も促しが今後は必要。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	リビングには外出できない分、職員入居者で作成し四季折々の壁画を張るのをしている。季節を表す飾り付けを利用者全員が分かる場所に設置し良い意味で利用者の刺激を作っている。	リビングの壁面には季節感ある貼り絵や行事の写真、近所の方から頂いた折り紙作品などが飾られている。小上がりのかたつで寛ぐ利用者の姿も見られる。定期的な換気や温度・湿度管理に加え、高性能空気清浄機も整備され、衛生的かつ居心地よい生活空間となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	和室を活用し、お茶を飲みながらテレビを観る。話したくなるようにポット、お茶、煎餅、テレビを配置するなどの環境を整えている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時や入居後に家にあつた家具や布団など持ってきていただき、本人が住み慣れた空間を作れるように心がけている。	既設のベッド、エアコン、クローゼットなどのほか、馴染みのものを持ち込み、自宅での生活に近い環境づくりを支援している。居室を和室風に変えて和布団を愛用している利用者もいる。家族写真や余暇活動の作品などが壁に飾られ、使い慣れた化粧台や裁縫箱などを持参され、心地よい空間となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室には許可を得て表札があり、トイレにはトイレと表示したり、入居者が見ただけでわかるように工夫している。		